

国立劇場企画・監修

## 「歌舞伎の小道具」上映

平野 英俊

「舞踊の小道具」をテーマにしたレクチャーデモンストラーションと座談会を行うことが決った時点で、何か前座的な映像のものを見せる必要を感じ、日本舞踊と深いつながりをもつ「歌舞伎の小道具—その扱い方」の映画を思いついた。

この一連の映画は、国立劇場の自主企画によるもので、伝統芸能普及のため、各種芸能の美や仕組みを平易に紹介することを目的としている。一般の鑑賞用、また社会教育・学校教育の教材用として一般貸出しを行って、手軽に利用できる。製作した会社からは市販もされている。会員諸氏にも大いに利用してほしいので、この場を借りて紹介しておく。

国立劇場の資料によると、平成4年までに「歌舞伎の魅力シリーズ」が12点、その他の歌舞伎のものが12点、能が6点、狂言が2点となっている。歌舞伎の中には「舞踊」や「女方」等、日本舞踊と関係の深いものがあり、ぜひこの学会でも上映してほしいと思う。

「歌舞伎の小道具—その扱い方」は、昭和58年学習研究社が製作したもので、「歌舞伎研究生教材シリーズ」のNo3に当る。16ミリカラー版、上映時間は45分である。

歌舞伎研修生は、国立劇場が歌舞伎俳優を一般から募集して養成している生徒で、この映画はその教材として製作されたもの。映画には第七期の研究生が出演している。

## 〈映画の内容〉

まず、小道具が歌舞伎の演技を引きだてる例として、「寿曾我対面」の五郎が三宝をつぶす場面を見せる。次に、舞台公演を前にした研究生が、講師の中村又五郎に指導を受けている所をカメラが追う。演目は「双蝶々曲輪日記」の「引窓」の場。

又五郎は、刀の差し方、手ぬぐいのかぶり方、後見の小道具の渡し方、煙管の持ち方、等を実際の演技の中から注意点を引出し指導していく。老婆役がお金を出して、人相書と取り返えようとするシーンでは、老婆のお金への心理を考慮し「お金を大事に扱うように」と見本を示して指導していたが、役者の心得の大切さが良く表われたシーンであった。

また、出道具と蔭道具、持ち物の説明や、藤浪小道具店の土蔵にある古い刀、鎧、兜、首、等の

紹介、それらを製作する職人の作業も画面に出てくる。保存、修理の陰の苦労がよく出ていた。

最後は、公演当日のシーン。「引窓」のひもを使って練習する風景から実際の演技へと映画は展開する。

この映画の結論として、いかに舞台で小道具が大切であるかを教えているが、もうひとつ歌舞伎の小道具の本質が捉えにくい面もあった。

## 〈映画から何を学んだか〉

映画を見終った後、ある学会員から「中村又五郎の芸への厳しさに感動した」という意見が出た。舞踊の小道具と直接関係した意見ではなかったが、伝承芸の有り方を、この映画は確かに捉えていたと思う。

「歌舞伎の小道具—その扱い方」という題名からは、小道具の扱い方の技術的な面を想像するが、この映画にはその点が稀薄である、小道具に対する演技者の心理、舞台演技上での小道具の取捨、お客への心遣いの方がまさっている。中村又五郎の伝承への気迫が深く印象に残る映画であった。

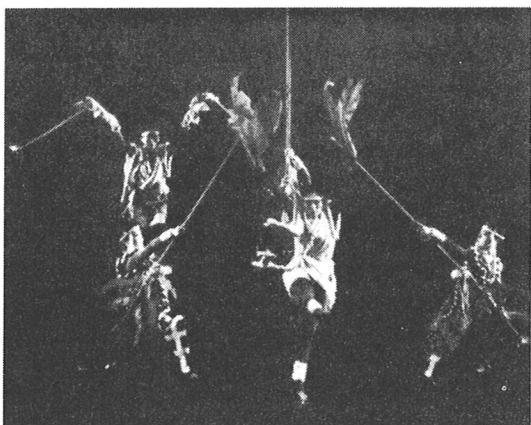
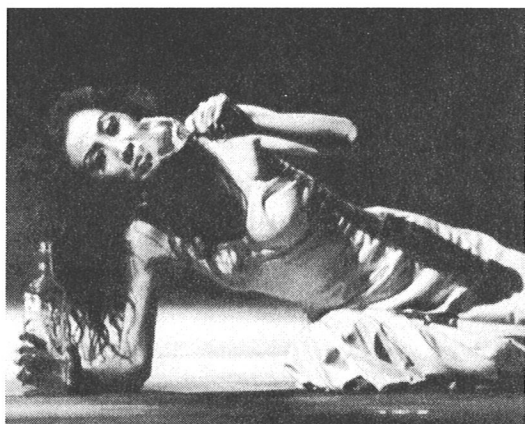
歌舞伎芸の主役は父から子へ世襲制でどうにか型として受け継がれているが、脇役の芸の伝承は実にさびしい限り。小道具に焦点をあてた映画ではあったが、歌舞伎芸伝承者の強さ、大切さを教えられた。

しかし、「舞踊と小道具」というテーマに充分添えないものであったのではないかと反省している。

なお、この映画の他に「歌舞伎の魅力シリーズ」の中に「小道具—骨寄せの岩藤—」16ミリカラー版、30分のもので、平成2年、学習研究社によって製作されている。



- ☆ 写真上「踊楽図」花柳照奈作品  
上左 太鼓，米俵などを持って。  
上右 百合の花，フサ付きのヒモを持って。
- ☆ 写真中左 「通夜の客」五十嵐生野作品
- ☆ 写真中右 「欲望という名の電車」佐藤桂子作品
- ☆ 写真下左・右「風林火山」金井美三枝作品  
13：50～15：20までの間，以上の4作品をトクヨ  
記念体育館1階で鑑賞していただきました。



\*1993年度春季第35回舞踊学会  
『舞踊學』第17号より転載